

横に成ると足が支へる三疊の室に寝をべつて、天井の節穴を仰いで居た信夫は、俄に右手を空に舉げて烈しく打振つた。あゝ其胸は今堪へやらぬ間に包まれて居るのであらう。

不孝兒

美知代

『何故、何故母様は……』斯う考へると最早不快の念が村々と起つて、堪へ難くなるのが僻である。信夫は人として尠くとも斯くするが正しい道と自覺つて居るのであるから東京に出て來たのは、決して不孝と思はない計りで無く、父の子である以上、汚れた母の手から脱して獨立しやうと云ふ腹であつたのは云ふ迄も無いけれ共其東京に來て殆んど四ヶ月、日々朝から晩迄歩き廻つても、勞働に得堪へぬ渠は尙適當な職か無いので。折柄尠からず其心を動したのは、前非を悔ひて今や瀕死の病床にある、是非歸つて呉れる様と新聞の希望廣告欄を借りての母の便り、あなやと喜んだが、又忽ち悲しくなる、渠は兩手を顔に押當て、更け行く夜を泣き明さうとするのか、唯譯も無

く溢れる涙を如何すればよからうと、終には一種の惶れを覺えて、思はずも身の毛をそば立たた、それは火の氣の無い故もあつたらう、けれ共信夫は事實やる瀬無さが嵩じて、おのゝいたのであつた。『あゝいつそ歸らうか、歸るのが本當かも知れぬ』浸々其様にも思つたが、

『否々一度犯した罪は消えるものじや無い、それに父様の……左様だ母様への義理は無い筈だッ』

思ひ回して信する處ありげに莞爾としたが、忽ち飛び起きて、机の引出しから一葉の新聞紙を取出し疊んだ折目をのびした後、薄暗い二分心をかき立て、讀むとしたが、見る内に眉をあつめて、ひうとそれを胸に押當てた儘、堅く唇をかみしめて、涙はとめ途も無く青白めた頬を流れるのである。

(完)